

## 「ゴッホ展」 初期作品から後期印象派と呼ばれた作品までを展観

上野の森美術館 19. 10. 11~20. 01. 13 兵庫県立美術館 20. 01. 25~03. 29

「フィンセント・ファン・ゴッホ」(1853~1890)は、わずか37年の生涯のうち画家として活躍したのはわずか10年に過ぎず、代表作の大半は晩年の数年間で描かれたもので、“鮮やかな色彩と勢いのある筆使い”で人気がある。

画伯は、27歳頃にオランダ「ハーク派」と交流しながら暗い色彩で農村風景や静物などを描き、目にした風景や事物をデッサンし、その後「印象派」と出会い、鮮やかな色づかいが生む効果に驚き独自の作風を確立している。

本展は、世界各国から画伯の作品「約40点」が終結し、貴重な初期時代の作品も展示されて、「ハーク派」のマウフェ、ラッパルト、「印象派」のモネ、ルノアール、ピサロなどの画伯の作品に影響を与えた画家の作品「約20点」も展示されている。「ゴッホ」の画家としての原点を示す初期から「ポスト印象派」を代表する画家になるまでの劇的な成長過程を辿るという企画である。



《白い頭巾の農婦の顔》1885年  
油彩/カンヴァス

《ジャガイモを食べる食卓の5人》  
1885 リトグラフ

“貧しい人達が不思議な小屋の薄暗い明かりのもとで食べる食事の状態”を描いた作品は、大地に結びついた農民生活そのものを描きたかった

とする有名な大作で、愛着と共感の極点とも言えるもので醜くて力強い。



《トウモロコシ畑とポピー》《若麦》 1888年 油彩/カンヴァス

《糸杉》1889年 油彩/カンヴァス  
南仏特有のがっしりした「糸杉」が、画面全体にあたかも絶えず動いているかのように天に向かって強烈なタッチで燃え上がり、前景のやぶいちごの茂みは、低くて全体はうねるようで黄色、緑色、堇

色に、空は緑とピンク色で三日月が描かれている。作品は、線も形もエジプトの「オペリスク」のように美しく、緑~茶褐色の糸杉の大木がなんとも素晴らしい色彩で表現されている。